

氏名（本籍）	酒井智弘		
学位の種類	博士（心理学）		
学位記番号	博甲第	9885	号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	感謝表出スキルの実行が互惠関係の形成を介して対人認知に及ぼす効果		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮 容子
副査	筑波大学准教授	博士（文学）	大塚 泰正
副査	白鷗大学教授	博士（心理学）	湯川 進太郎

論文の内容の要旨

酒井智弘氏の博士學位論文は、感謝表出スキルという概念を創出し、この概念の妥当性を証明するために、感謝表出スキルの実行が互惠関係や対人認知に及ぼす効果を検討したものである。本論文は、「理論研究」「実証研究」「総括」から成る 3 部構成であり、全 7 章から構成されている。要旨は以下の通りである。

第 1 章では、国内外における感謝研究を概観し、従来の感謝研究では、「感謝」という概念を「特性感謝」「状態感謝」「感謝表出行動」といった観点から研究されてきたことを述べている。著者は、従来の感謝研究の知見から、感謝表出行動は、感謝する側と感謝される側の双方に利益をもたらす効果があるにもかかわらず、現実の対人関係の中で必ずしも実行されていないという課題を指摘し、「感謝表出行動」にソーシャルスキルの観点を採り入れた研究の必要性を主張している。

第 2 章では、国内外におけるソーシャルスキル研究を概観し、ソーシャルスキルの定義や理論モデルを説明している。また、「ソーシャルスキル」という概念を、対人相互作用における感謝表出行動を実証的に捉えるための理論的な枠組みとして扱うことで、具体性のある深化した感謝表出行動の研究を行うことができることを主張している。

第 3 章では著者は、第 1 章、第 2 章での研究レビューを踏まえて、感謝表出行動にソーシャルスキルの観点を採り入れ、従来の感謝研究およびソーシャルスキル研究の両研究分野に対して新たな視点や実践的な意義を与えるために、「感謝表出スキル」という概念を創出している。感謝表出スキルの意義について説明した上で、本論文の研究目的は、「感謝表出スキルの実行が互惠関係の形成を介して対人認知に及ぼす効果を解明すること」であることを宣言している。

第 4 章では、感謝表出スキルの実行が互惠関係の形成と対人認知に及ぼす効果を検証するために、研究 1 から研究 4 までの実証研究を行っている。研究 1 では、半構造化面接調査によって、同性および異性の友人関係を対象に、感謝した場面、感謝感情の状態、感謝表出行動それぞれを質的に分析し、感謝表出スキルの実行に至るまでの生起過程について、一定の生態学的妥当性に基づいた示唆を得ている。研究 2 では、初対面の 2 者間を対象に囚人のジレンマゲームを実験室で行い、感謝表出スキルの実行が、ジレンマ状況にいる感謝される側の協力行動を維持し、互恵意識を高めることを実験的に実証している。研究 3 では、研究 1 の結果をもとに感謝表出スキルの実行を測定する 10 項目を作成した上で、「感謝表出スキルの実行」が「知覚されたサポート」を媒介して「孤独感の低減」に及ぼす効果を、質問紙調査によって実証している。研究 4 では、研究 3 の結果を頑健なものにするために、感謝表出スキルをト

レーニングすることによって、日々の感謝表出スキルの実行を促すと、孤独感を低減させることができることを、介入実験によって追認している。研究1から研究4までの実証研究を行った結果、感謝表出スキルの測定に関する課題と、孤独感が高い者をスクリーニングする課題を明らかにした。著者は、これらの課題を解決することで、感謝表出スキルが互惠関係の形成を介して対人認知に及ぼす効果を精緻化できると考察した。

この考察を踏まえて著者は、第5章では、感謝表出スキルの実行を測定する尺度についての妥当性を検証するために、研究5から研究8までの実証研究を行っている。研究5では、感謝表出スキル尺度の妥当性に関する複数の証拠を収集している。また、感謝表出スキルの行動レパトリーのうち、どのような行動が適切かつ効果的であると認知されているのかを明らかにし、適切性と効果性を備えている感謝表出スキルの行動レパトリーを測定できる項目を選定している。研究6では、感謝表出スキルの実行の実態を調査し、感謝表出スキルの行動レパトリーのうち、どのような行動が実際に実行されているのかを明らかにし、実態に即した行動レパトリーを測定できる項目を選定している。研究7では、感謝表出スキル尺度の信頼性をさらに頑健なものにするために、感謝表出スキル尺度の再検査信頼性を検討している。また、感謝表出スキル尺度の予測的妥当性も検討し、感謝表出スキル尺度得点の高い者ほど、「知覚されたサポート」「互惠意識」「信頼感」を高く評定し、「孤独感」を低く評定することを実証している。研究8では、感謝表出スキル尺度得点が高い者は第三者の他者から見た場合でも、感謝表出スキルの行動レパトリーを上手に実行できていることを実証している。著者は、研究5から研究8までの実証研究を行い、感謝表出スキルの実行を測定する尺度を開発した。

第6章では、感謝表出スキルに関する最適な実行方法と実行レベルのランク評価を明らかにした上で、これらの手法を取り入れたトレーニングの効果を検証するために、研究9から研究11までの実証研究を行っている。研究9では、感謝表出スキル尺度とソーシャル・ストーリーという手法を用いて、感謝表出スキル尺度得点が高い者は、様々な対人感謝場面で感謝表出スキルの最適な実行方法を選択することを実証している。研究10では、感謝表出スキル尺度に潜在ランク理論を適用し、感謝表出スキルの実行レベルを順序性のあるランクで評価できる手法を提案している。研究11では、研究4で明らかになった課題を解決するために、孤独感の高い者をスクリーニングし、研究9と研究10の知見を取り入れた感謝表出スキル・トレーニングを行い、他者に対する信頼感の向上と孤独感の低減に対して一定の効果があったことを実証している。

第7章では、第4章から第6章までで実施した計11個の研究成果を総合的に考察している。著者は、計11個の研究成果から、「感謝表出スキルの実行は、感謝する側を取り巻く他者との互惠関係を形成・維持し、その互惠関係を介して、当人の対人認知を改善する」と結論づけている。

審査の結果の要旨

(批評) 本論文は、ポジティブ心理学の興隆により研究されてきた「感謝」という心理的現象に対して、ソーシャルスキルの観点を加えて、新たな示唆や実践的なインパクトを与えるものである。本論文は、対人相互作用の中で生じる「感謝」という現象を、ソーシャルスキルの観点から捉え、「感謝表出スキル」という概念を創出した点が大きな成果である。著者は、感謝表出スキルを実行すれば、感謝される側からの協力行動を強化・維持したり、感謝する側への互惠意識を高めたりすることから、感謝される側との互惠関係を形成することができることを、実証研究を積み重ねて明らかにしている。また、感謝表出スキルを実行すれば、感謝する側の孤独感が低下したり、他者に対する信頼感が向上したりすることから、対人認知を肯定的に変容することも明らかにしている。これらの研究成果は、「感謝」と「ソーシャルスキル」の両研究に対して学術的かつ教育的な意義を与えると評価された。

令和3年1月12日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。